

(鷲石考) 元來動物が特殊な石を以て其の産を生育を助けるといふのは、東西ともかなり昔から信ぜられた民間の慣俗であつた。たゞへば煮られた卵を、藥石を以て暖めへかへした鶴の話がすでに張華の「博物志」にも載つて居り、又朝鮮人參を用ひた鶴が「善道寺道名所圖會」にもあり。同じ話が「甲子夜話」十七にもあつて、老松の軒近く蔽ふ古い家で、この梢の鶴が曾てさうであつたといはれて

も、もう何の疑心を抱かぬ迄になつて居るのである。西洋でこの石を安産の外に盗人探案にも用ひて効ありましたのはさういふ譯か、例の中空にして中に効あること、恰も盗人の懷中に脏物あり見たのかも知れぬ。この外に又癩疖病を治す藥石だとも云ふ。かうなるに、溫泉も同様何にでも利くかも知れない。が、やはり久しく服して仙人になる方が一段氣樂な話といつてよいやうである。

西都に去つた高田景君

田 中 生

復興局の横濱出張所長高田景君が、京都市の土木局長に

であらう。

爲るので這般退官した、君はわが路政界の功勞者として常に我々の敬服する人であつて、其の退官を惜むのであるが、是も萎靡振はない京都市路政改革の爲なら忍ぶより外ない

君は男性的の快男兒であるのに、あの女性的な京都に餘程因縁の深い男だ、明治四十一年に京大理工科を出て、京都府土木工師、次で京都府技師に爲つてゐること三十年に及

んでゐる、一年か二年で各地を轉々流浪する今の技術官中間として全く珍らしい方で尻輕の君には不似合な程よく腰を据えてゐたものである。夫れも其筈だ當時の知事は例の名府に謳はれた大森男で、大學を出たばかりの高田君や今の山口縣知事の大森君などを、我が兒のやうに可愛がつて指導養成し是等若手連中も亦男を慈父のやうに敬慕したものだ、従つて假令他から榮轉の勧めがあつても慈父は浪荒い他府縣に手離するのを氣遣ひ、當人も温かい懷に抱かれて居たかつた様なわけで遂に十年を暮したのだ。

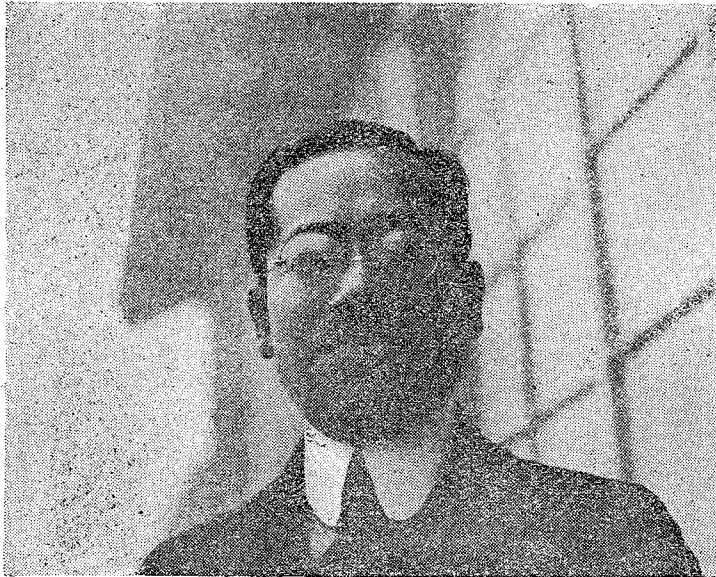
十年、随分永い間だが併し醉生夢死の十年ではなかつた學校を出たばかりで實際の仕事は何も知らない、在學中纔に朝鮮鐵道を測量した位の經驗しかない君を、時の土木課長寺崎新策君がオイ君は工師だ技師だこ煽て、使つたものだ、夫れで君の技能は異常に進歩熟達した、口善惡ない連中は、技術の方も教へたであらうが、寺崎君や京大の平野教授が、教へなくつても可い祇園遊までも教へたと言つてゐる、教へたのが悪いか教へて貰ひに行つたのが悪いかは

暫く別として、兎も角寺崎君指導の下に活動し勉強したの
は事實だ。

始めの内は京都に近い八瀬の山奥にサスペンション橋を始めて獨りで架けて喜んだりしてゐたが、京都府未曾有の災害と言はれた明治四十年の災害復舊工事が、君をいつ迄もお坊チャンで遊ばしては呉れなかつた。災害復舊工事の主任者として日夜東奔西走、實に君を酷使したものだつた。いま京都府下橋梁の十中八九までがトラス橋に爲つてゐるのは一に君の計畫に依るのだ、災害復舊工事後も原案執行までして計畫した由良川改修工事の主任技師に爲つて、由良川の海に入る所に頑張つてゐた瀬戸島を除却したり、數里に亘つて堤防を築造したり、随分忙はしい生活に日を送つた、京都府下何れの地に行つても君の足跡を印しない處はないであらう、と言ふ位に出張したものだ、お餘り立派でないが歳は若いし獨身もので例の調子で騒ぐので、各地到る所と言ふに少し大袈裟だが出張先の旅館では随分持てたものだ、今でも此處彼處の旅館に逸話の一つ

や二つは殘してゐる。

技術的自信を得た君は、土木課長に爲りたいとの野心を出したが、例の慈父がゐて、マゝ待て三等縣の土木課長位は斷はれと言つた調子で之を制へてゐるが、君の身邊にはいつまでも慈父は居て呉れなかつた、夫れと言ふのは大森男が退官して例の木内重四郎氏が知事と爲つて來たので、昔のやうな温かい氣分は高田君の周圍から失はれてしまつた、恰もこの時神奈川縣知事有吉忠一氏の懇請があつたので大正七年同縣土木課長と爲つて、茲にも居ること八年、有吉氏に次いで安河内、清野、



堀切氏等諸知事の下に随分働いた。

氏に向つて、閣下の神奈川縣知事としての大功績は、

高 田 景 君

事業の妙い京都にばかり永く居た高田が大縣の神奈川に來て何するだらう、ミは友人の間に交された言葉であつたが、土木事業の好きな有吉知事や清野知事の下で随分色々な建築をして兩氏の起業心を唆つた、我が路政だけに就いて見ても京濱國道や横須賀國道の改修、馬入、酒匂兩橋の架換から箱根峠の改修、等々ミ随分大きな仕事を思ふ存分にやつて友人の心配を全然裏切つて了つた、京濱國道竣功式のミき某縣會議員が有吉

高田君を土木課長につれて來た其の一事であると言つて感謝してゐた。夫れ程君は神奈川縣で大事業を遂行したのだ。

例の大正の大震災の際には父を失ひ家は焼かれるといふ災難に遭つた、物事を餘り氣にしない君も、此時ばかりはいくらか悲觀の體に見えたが、でも其の時は私事を顧る暇はなかつた、夫れは破壊された道路や河川を如何にして速に復舊し羅災者を救護すべきかといふ當面の急問題に直面してゐたからである、病父や焼出された家族は他人に託し日夜活動して復舊策を樹てた、併し君の復舊策は普通技術家の考へるやうに唯だ舊に復すと言ふ平凡な遣り方ではなかつた、時運の趨勢に鑑み將來を遠觀して改良しやうとする積極的な復舊策であつた、その中で最も痛快なのは、いつも本誌で紹介されてゐる東海道沿の樞要町内國道の改良であつた、此様なときは財政難を理由にして常に消極的に流れ易いのに國庫が補助する筈だと言ふ考のものに、路幅擴張を命令したものだ、ところが政府は補助しないと言

ふことに爲つたとき、時の長官安河内氏からは火の出るやうなお叱りを蒙つたばかりか、此大問題を専行した責を負ふて辭職せよと言はれた、僕の辭職は易いことだが今此儘で復舊すれば東海道の改良を實現する機會が無い、何でも國庫が補助すれば可いのだ、補助問題は私に委せて呉れと言つて知事の内諾を得た、夫れから言ふものは静岡縣廳寄贈の小供の護模靴にゲートル姿で、内務省土木局長から會計課長、夫れから次官大臣に陳情に駆けつり廻つた、その時の姿は今も尙髣髴として私共の腦裡から消え失せることはない、遂に目的を達して補助を貰つたので東海道の改良を遂行したのである。之を想へば縣會議員謝意の言葉も通り一片の挨拶ではなかつたらう。

君が京都や神奈川で確立てられ、同僚や先輩よりは一足先に勅任技師を爲り、同人等の羨望裡にさつさ官場から足を洗つたのを人は幸運兒だと言つて居るが、或は其の通りかも知らない、が併し此幸運を招來したのは先に言つたやうに君の奮闘努力の結果に依るのだ、私は運命なんか言

ふこみを捨て、そう信じたい、けれども君が京都や神奈川
或は復興局で博した名聲は、直ぐに之を君の京都市の將來
に移して其の牙え腕を振はしむかは疑問だ。眼の前に空前
の慶事―御大典を控えてゐるので街路の舗裝やら道路の改
修やら、博覽會場の建築など京都としては比較的大きな仕
事がある、併し是等は君が神奈川縣や復興局でやつた事業
に比較するに殆んど言ふに足りない位のもので、君には寧
ろ輕過ぎる位だから筆者が疑問視する理由は他にあるの
だ。

今は神奈川の初期時代と違つて君も齡既に不惑の域に達
してゐるから、俺の癖は別嬪だ、なんて知事新任披露の宴
會で、初對面の安河内知事に惚氣を言つたやうな失敗をし
ないだらうが、京都には或意味から言ふ悪友が澤山君を待
つてゐる筈だ、是等の連中に煽てられて世の非難を受けな
いやうに注意することだ、そう言ふのは外でもない、關西
邊に職を持つてゐる京大出の技術家は、所謂京大閥を造つ
て東大に對抗しやう、と言つたやうな京都らしいケチな考

を持つてゐて、時に其の實現を目論むのだ、君が今度京都に
入つたのも或は其の連中の推薦に依るのかも判らないが、
京大だらうが東大だらうがよしんば學校出で無くとも生活
の爲には唯だ手腕實力があれば足るのだ、閥を組んで公事
私事を混合して私慾を遂げやうとするのは唾棄すべきこと
で、而もいつもそれが禍の種となるのだ、關東で振つたそ
の手腕を閥の爲に撃肘されないやうに、先輩だらうが恩人
だらうが公私を區別して、公正を念として働くことだ。

悪友に次で京都には悪縁もある筈だ、府會や市會に列す
る議員には、昔の君を知り君も亦是等のものと親交がある、
併し是等の連中は必ずしも君を思ふ爲の親友ではない、自
分の爲自分の利益の爲に君を利用しやうとする連中で、赴
任を機會に是等のものと縁を切ることだ、何れの大都市も
同じだが迎へるときは甘言を以てするが、少しの行違や感
情で直ぐ追出し計畫をするのが常態で殊に京都はそれが甚
しい、悪縁があればある程君の内容がよく判るから、一層
追出し計畫に理由を附加せしめ易いかも知れぬ、神奈川時

代に得たやうな名實相伴ふ親友の縣會議員は恐らく京都には居ないだらう、君が餘り議員の操従を上手にやらうと焦慮つて親交に深入りするのには、却つて君の京都に於ける生命を縮める因だ。

遊び好きの君を一層遊ばす様に爲ることも君を京都に遣り度くない一つの原因である、高田ハンが來ヤハツタなんと言はれて祇園通ひをやるのも、時には可いだらうが、京都人間には猜疑心が多い、君のやうな開放的の豪遊は假令自分のポケットマネーでやつても兎や角言ひ度がる弊がある、是等の悪宣傳が積ることに依つて君を排斥する緣由

なるかも知らぬ、神奈川時代に一萬圓の報酬を以て迎へられた君を辭退せしめた私は、金を餘計に貰へば貰ふ程使つて了ふ君の性格を知るからである、俸給の増加に依つて君の體を心配するのは必ずしも私一人では無からう、人の嗜好を無理に抑制する積りでは無いが無るべく節酒して貰ひたい。

随分無駄口を叩いたが、君をして尙一層路政に貢獻せし

めたい老婆心に依るのであつて、眞に君を想ふ爲には實は京都に遣り度ない、モ一少し中央に居て我が路政の爲に働かせ度い、夫れが君の爲否な國家の爲であつた、併し既に之を振り切つて行つた以上は十分戒心して、私の忠言を唯の杞憂に終らしむることに努めて貰ひたい、小理窟を並べて仕事もせずに布圍着て眠てゐる京都人士を叩き起して、遊覽都市なら夫れに相應はしい施設をするが可い、市電の仕事も片手間にやつて市勢の進展に盡すが可い、思ひのまゝを述べ君の多幸を祈つて筆を擱く。